

カール・クラウスのアフォーリズム

著者	堺 雅志
雑誌名	長崎外大論叢
号	10
ページ	173-180
発行年	2006-11-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1165/00000259/



カール・クラウスのアフォリズム

Karl Kraus' Aphorismen

堺 雅 志

Abstract

Die Charakteristika der Aphorismen von Karl Kraus werden folgendermaßen beschrieben:

Erstens: In Kraus' Aphorismen wird etwas in der „Konfliktform“ dargestellt, was antipodisch zu der von ihm kritisierten „Phrase“ liegt. Es wird durch seine dichotomische Denkweise ermöglicht und hat keine Synthese, somit verhält es sich wie die Gegensatzpaare „Sprache als Gestaltung“ contra „Sprache als Mitteilung“, „Vers“ contra „prosaischer Sprachgebrauch“, „Wortgestalt“ contra „Phrase“.

Zweitens: Seine aphoristischen Ausdrücke bergen durch die „mechanische Umdrehung von Redensarten“ eine andere Weltanschauung in sich als die, die die Redensarten bzw. Sprichwörter, Phrasen gemeinhin darbieten können.

Drittens: In diesen zwei charakteristischen Kunsttechniken kristallisiert sich im höchsten Maße die „Isolierbarkeit“ des Textes, in der eine nicht kontextgebundene, sondern „naturanotwendig“ aneinandergebundene Sprach-Welt konstruiert wird.

Diese drei Hauptcharakteristika sind vor allem in seinen Aphorismen über die Sprache auffallend. In ihnen kommt die Vorstellung seines zentralen Begriffs „Wortgestalt“ ans Licht, in dem die Koinzidenz von Sprache und Gedanke verwirklicht sei.

アフォリズムの歴史におけるクラウスの位置

ドイツにおけるアフォリズムの歴史を吟味すれば、その歴史の端緒には必ずリヒテンベルクが置かれ、十九世紀においてはゲーテをはじめとしてショーペンハウアー、ニーチェと錚々たる顔ぶれが並ぶ。ゲーテ以降のアフォリスティカー (Aphoristiker 箴言作家) は常にリヒテンベルクの影響下にあった。にもかかわらずリヒテンベルクは、十九世紀には事実上ほとんど忘れ去られていた文筆家のひとりである。いわばリヒテンベルク・ルネサンスとして彼を二十世紀に呼び覚ますのに貢献したひとりが、カール・クラウスである。ディーター・ランピングは、クラウスのアフォリズムを引用し、クラウスのアフォリスティカーとしてのリヒテンベルクに対する高い評価、すなわちリヒテンベルクをゲーテよりも上位に置く評価を紹介している。¹

¹ ランピングはクラウスの「リヒテンベルクは誰よりも深く掘る。けれども彼は再び登り来ることはない。彼は地の奥深くで語っている。自ら深く掘る者しか彼のことは聞けない。」Lichtenberg gräbt tiefer als irgendeiner, aber er kommt nicht wieder hinauf. Er redet unter der Erde. Nur wer selbst tief gräbt, hört ihn. [Karl Kraus: *Schriften*. Hg. von Christian Wagenknecht. Frankfurt a.M. 1986-1989, Bd.8, S.127. 以下巻数とページ数のみ引用末尾に示す。] というアフォリズムを引用し次のように語っている。「これは明らかにゲーテが抱いた『この上もなくすばらしい魔法の杖』というリヒテンベルク像に対する揶揄であり、それと同時に、リヒテンベルクを『魔法の杖』とするのではなく、〈墓堀人〉として、ゲーテの比喩を修正している。ゲーテはいわばリヒテンベルクを過小評価し、自分自身をリヒテンベルクの読者として過大評価している。」Dieter Lamping: *Lichtenbergs literarisches Nachleben*. Göttingen 1992, S.121.

稀代の諷刺家カール・クラウスが極めて肯定的に評価し、彼の個人誌『炬火』誌上でも繰り返し引用し、思想の拠り所とした代表的な人物が、リヒテンベルクとショーペンハウアーであった。ショーペンハウアーに関していえば、クラウスの論集『言語』の扉には、モットーとしてショーペンハウアーの『付録と補遺』からの文章をコラージュに仕立てたものが掲げられている。²これとは逆に、クラウスのハイネに対する極端に否定的な見解もまた、逆説的な影響関係ということができる。

ところで、ドイツのアフォリスティカーの系譜の中でクラウスほど、人が口にし、耳にし、あるいは書く言語を、微視的に観察し批判し続けた批評家はいない。さらに、人間に関わるあらゆる事件、あらゆる事象、あらゆる状況をも、言語に起因する問題として批判し続けた稀有の批評家であり続けた。いわば実践的言語批判の急先鋒といえる。クラウスの後に続くアドルノやブレヒト、カネッティ、ヴィトゲンシュタインらは、クラウスからの思想的、文体的影響を様々な箇所でも告白している。特にカネッティは、クラウスを「耳の鍛錬場」と名付け、実際に聴衆のひとりとして体験したクラウスの朗読会の模様を、回想録の中で活写している。³

あるいは、スタニスラフ・レックのアフォリズムには、クラウスを念頭に置いたと思われるアフォリズムが随所に見られる。「はじめにことばがあった—おわりにフレーズがあった。」*Im Anfang war das Wort – am Ende die Phrase.* [S.17]「本物の諷刺は傷つけるのではない—殺すのである。」*Wahre Satire verletzt nicht – sie tötet.* [S.319]⁵これらをはじめとしてレックのアフォリズムの中には、クラウスが展開したフレーズ批判を彷彿させるものや、諷刺家としてのクラウスその人自身を描写するようなアフォリズムが散見される。⁶これらアフォリスティカーの系譜においてクラウスを際立たせているのは、言語そのもの、および言語に関わる様々な事象に関する言及の多さと、その内省的態度の深さであるといつてよい。

ジャンルとしてのアフォリズム

そもそも、アフォリズムというジャンル分けを果たしたのは、フランツ・マウトナーで、彼は、アフォリズム的なるものの歴史を追う過程で、それまで *Maxime*、*Sentenz*、*Fragment* そして *Aphorismus* など、⁷名称を異にしていた一連の同種の言語芸術形式を、それらに共通する特徴である「着想」*Einfall* と「浄化」*Klärung* という概念を用いて、近代的な意味でのジャンルとしてのアフォリズムを定義した。⁸これが今日、アフォリズムと一括りにされるジャンルとなっている。このジャンル分け

² その題辞の冒頭は次の通りである。「これらすべて些末な問題ではない。それは印刷インキの卑劣な汚し屋によって、文法と言語精神が台無しにされてしまうことに他ならない。これには異論の余地はない。ドイツの言語はすっかり騒乱状態に陥ってしまった。誰も彼もが手を出し、インクの汚し屋たちが餌にありつこうと飛びついてくる。」*Arthur Schopenhauer: Sämtliche Werke.* Frankfurt a.M. 1986, Bd.V, S.623. 論集『言語』の出版がクラウスの死後であるため、この題辞が掲げられたのが、クラウスの意図なのか、編集者であるハインリヒ・フィッシャーの意図なのかは判じえない。[Bd.7, 7]

³ Vgl. Theodor W. Adorno: *Gesammelte Schriften.* Darmstadt 1998, Bd.4, S.61, Bertold Brecht: *Gesammelte Werke.* Frankfurt a.M. 1967, Bd.18, S.15, Ludwig Wittgenstein: *Werkausgabe.* Frankfurt a.M. 1984, Bd.8, S.482 u. S.542.

⁴ Elias Canetti: *Die Fackel im Ohr.* Frankfurt a.M. 1982, S.66ff. u. S.207f. その中でカネッティは「私は、人が他の人びとの言葉を用いてどんなことでもないうるという事実を、カール・クラウスから学んだ」と影響を認めている。

⁵ Stanislaw Jerzy Lec: *Sämtliche unfrisierte Gedanken.* Hg. u. übertragen von Karl Dedecius. München u. Wien 1996.

⁶ マルセル・ライヒ＝ラニツキは「レックは、その著書『刈り込まれていない思想』によって、リヒテンベルクからハイネ、ショーペンハウアーを経てカール・クラウスに至るドイツの伝統に連なり、その著作はカール・デデーキウスの優れた翻訳で数十万部が頒布され、幾度となく新聞にも掲載された」と紹介している。Marcel Reich-Ranicki: *Mein Leben.* München 2000, S.306.

⁷ これらの単語はどれも、「金言」、「箴言」、「格言」、「名句」などと訳しうる。

⁸ Franz H. Mautner: *Der Aphorismus als literarische Gattung.* In: Gerhard Neumann (Hg.): *Der Aphorismus. Zur Geschichte, zu den Formen und Möglichkeiten einer literarischen Gattung.* Darmstadt 1976, S.19-74 u. FM: *Maxim(e)s, Sentences, Fragmente, Aphorismen.* In: GN(Hg.): a.a.O., S.399-412.

の作業が行われたのが1930年代初頭であるから、極めて新しい区分だといえる。しかも年代から見ても、クラウス以降のことであり、クラウスのアフォリズムももちろん念頭に置かれていたことになる。

時代は下ってゲルハルト・ノイマンはこの分類を継承しつつ、アフォリズムの最も特徴的な形式を「葛藤形式」Konfliktformと名付けている。⁹これはアフォリズムの生来持つパラドキシカルな側面に焦点を当てた概念である。同様にハンス・マルゴリウスは、体系を持たない思考形式としてのアフォリズムの特徴をあげ、たとえばリヒャルト・ベンツの「アフォリズムは芸術形式 (Kunstform) ではない」というアフォリズムを援用し、従ってアフォリズムを自然あるいは生、そして現実に近い思考形式であると定義づけている。¹⁰

シュテファン・フェードラーは「孤立可能性」Isolierbarkeitという概念を挙げ、体系を持たない、テキストとしての孤立性、すなわち言語外部のコンテクストへの依存度の低さを指摘している。¹¹アフォリズムのそもそも持つ内省的な性格（自己遡及的性格）から、アフォリズムはそれ自体の内部で一個の言語環境を構築する。その言語環境の中で、書かれたことばは、統語的な制約を受けつつ相互に依存しあって、意味ないし世界を形成する。すなわち「孤立可能性」であるが、以上挙げたこれらの特徴が、クラウスがしばしば書いたアフォリズムについてのアフォリズムには表れている。¹²

クラウスの二分法的思考

ところで、「葛藤形式」Konfliktformの前提には、相対する二つのものの存在が必要である。二分法的な思考形式は、クラウスの場合極めて明瞭である。「アフォリズムは決して真理と一致しない。それは真理を半分にした片方か、もう片方である。」Der Aphorismus deckt sich nie mit der Wahrheit; er ist entweder eine halbe Wahrheit oder anderthalb. [Bd.8, 161] (傍点、下線は引用者) このアフォリズムには、entweder oder や、halb と anderthalb といった言葉遣いに、二分法的思考が示唆される。

ある文学教授が言った。私のアフォリズムは慣用句の機械的なひねりにすぎないと。これはまことに的を射ている。但し彼は、この機械を動かしている思想を理解していない。つまり慣用句の機械的なひねりは、機械的な繰り返しよりも多くのものを生み出すということを知らないのである。

Ein Literaturprofessor meinte, daß meine Aphorismen nur die mechanische Umdrehung von Redensarten seien. Das ist ganz zutreffend. Nur hat er den Gedanken nicht erfaßt, der die Mechanik treibt: daß bei der mechanischen Umdrehung der Redensarten mehr herauskommt als bei der mechanischen Wiederholung. [Bd.8, 332f.] (傍点、下線は引用者)

ここで下線を引いた箇所にある「慣用句の機械的なひねり」mechanische Umdrehung von Redensartenと「機械的な繰り返し」mechanische Wiederholungとの対比は、クラウスの技法と、クラウスが指弾す

⁹ Gerhard Neumann: *Ideenparadiese. Untersuchungen zur Aphoristik von Lichtenberg, Novaris, Friedrich Schlegel und Goethe*. München 1976.

¹⁰ Hans Margolius: *System und Aphorismus*. In: GN(Hg.): a.a.O., S.280-292.

¹¹ Stephan Fedler: *Der Aphorismus. Begriffsspiel zwischen Philosophie und Poesie*. Stuttgart 1992.

¹² 従来指摘されるように、社会的コンテクストへの依存によるクラウスの著作の難解さは事実として存在する。クラウスの理解に社会的文脈は必要不可欠ではあれ、言語そのもの問題として見たとき、それは普遍性を帯び、理解の可能性をテキストそのものが提供してくれる。従って、構築された言語状況内での読みが可能となる。この原則に則してクラウスのテキストは、普遍的に理解可能である。

るフレーズ（常套句、極まり文句）の特色との対比と重なり合っている。アンドレ・ヨレスの定義によれば、「ことわざ」Sprichwortや「慣用句」Redensartenは、経験の簡潔で具体的（bündig-anschaulich）な連関として自足（in sich beruhen）しているとされる。¹³つまりことわざや慣用表現が経験の表現の「機械的な繰り返し」によって外部に意味を求め続けるのに対し、アフォリズムは、そしてとりわけクラウスのアフォリズムは、「慣用句の機械的なひねり」であって、従来の世界ないし経験を言語によって変えることを意味する。別言すれば、言語はその反転によって世界が変わる可能性を胚胎しているのである。従って「アフォリズムは真理である必要はないけれども、真理を凌駕しなければならない。アフォリズムは一文で真理を超えねばならない。」Ein Aphorismus braucht nicht wahr zu sein, aber er soll die Wahrheit überflügeln. Er muß mit einem Satz über sie hinauskommen. [Bd.8, 117] クラウスの箴言集『箴言と反箴言』*Sprüche und Widersprüche*が、SpruchであるだけでなくWiderspruchでなければならない理由がここにある。二分法的思考は、「統合」Syntheseなき二項対立であって、「葛藤形式」Konfliktformである。彼の中期の代表的著作であるハイネ論の中の二項対立を拾ってみると下図のようになる。

『ハイネとその顛末』（1910年）における二項対立

Dichotomie in Heine und die Folgen

詩人 Dichter	ハイネ Heine
言語の中で生きる in der Sprache leben	素材によって生きる vom Stoff leben
言語の中から創造する aus der Sprache schaffen	言語を使って創造する mit der Sprache schaffen
思想 Gedanke	意見 Meinungen
自然必然性 Naturnotwendigkeit	装飾 Ornament
精神のための肉体（としての形式） [Form als] Fleisch zum Geist	身体のための衣装 Kleid zum Leib
フモールに跳躍を与える dem Humor den Sprung zumuten	フモールを提供する den Humor präsentieren
行為と事象 Tat und Ereignis	意図あるいは偶然 Absicht oder Zufall

ここで注目したいのは、クラウスの思考を追ってみると、彼は二項対立を挙げつつ必ずどちらか一方に与していることである。クラウスの渾身の論「言語」の中の二項対立は以下の図のようになる。

クラウスの二分法的思考－Syntheseなき二項対立

「言語」（1932年）における二項対立

Dichotomie in Die Sprache

言語の有機体 Organismus der Sprache	
造形としての言語 Sprache als Gestaltung	伝達としての言語 Sprache als Mitteilung
詩行 Vers	言語慣用 Sprachgebrauch
詩篇 Psalm	地方のニュース Lokalbericht
秘密 Geheimnis	規則 Norm
生きたもの Lebendiges	死んだもの Totes
ことばの姿 Wortgestalt	フレーズ Phrase

||
根源 Ursprung

¹³ André Jolles: *Einfache Formen: Legende, Sage, Mythe, Rätsel, Spruch, Kasus, Memorabile, Märchen*. Tübingen 1999, S.155f.

一方の側には「姿を持つことば」Wortgestaltがあり、他方には「フレーズ」Phraseがある。前者は、クラウスが重要視する「根源」と深く関わっている。

「言語」とハイネ論の二つの論はアフォリズムではない。けれどもクラウスの書く散文は、そもそもアフォリズム的文体を特徴として有している。それは、ハイネ論がそもそも、クラウス自身のアフォリズムを取り込み、また多くのアフォリズムがハイネ論から取り出されていることから明らかである。¹⁴ その中の一つにこうある。「ハイネは言語を使って創造しうる最高のものを創造した。もっと高いところには、言語の中から創造されるものがある。」Heine hat das Höchste geschaffen, was mit der Sprache zu schaffen ist. Höher steht, was aus der Sprache geschaffen wird. [Bd.8, 123 u. Bd.4, 209] 言語を手段とするのではなく、創造の源とするこの考えは、言語そのものを問題の俎上にのぼせずにはいない。アフォリズムの内省的性格がここに表れる。

小説とアフォリズム

「時間のあつた時代には、芸術というかたちで物事が解決されなければならなかった。新聞のある時代には、もっと性急に理解しようとするせいで、素材と形式とが切り離されてしまっている。私たちに時間がないので、私たちに作家たちは、本来かつかつ形づくれることを、くださしくいなければならぬ。」In Zeiten, die Zeit hatten, hatte man an der Kunst etwas aufzulösen. In einer Zeit, die Zeitungen hat, sind Stoff und Form zu rascherem Verständnis getrennt. Weil wir keine Zeit haben, müssen uns die Autoren umständlich sagen, was sich knapp gestalten ließe. [Bd.8, 237f. u. Bd.4, 207] これはハイネ論からアフォリズム集に採録されたものである。あることを明らかにする際に対立概念を用いて際立たせる手法もクラウスのアフォリズムの特徴であって、彼の二分法的思考がここにもみられる。新聞の言語の特徴を衝いたこのアフォリズムは、新聞の言語の特徴を「かつかつ」knappと「くだくだ」umständlichという反意語を使い説明している。クラウスは散文を問題にする際にも、同じumständlichという形容を使いつつ次のように言っている。「私は小説文学に以下のような理由から何ら異を唱えるものではない。すなわち、私の興味ないことがくださしく言われているのが、私には理にかなって見えるからである。」Ich habe gegen die Romanliteratur aus dem Grunde nichts einzuwenden, weil es mir zweckmäßig erscheint, daß das, was mich nicht interessiert, umständlich gesagt wird. [Bd.8, 253]

彼はまた、アフォリズムを同じ散文である小説(Roman)と対比させ、彼の求める散文のあるべき姿を浮かび上がらせている。ここで小説を念頭におきながら書かれたアフォリズムについてのアフォリズムをいくつか挙げる。「アフォリズムにはこの上なく長い呼吸を要する。」Der längste Atem gehört zum Aphorismus. [Bd.8, 238] 小説が持つはずの「この上なく長い呼吸」はアフォリズムのものだと主張する。「アフォリズムを書く者であるのならば、散漫に切り刻んで文章を作ってはならない。」Einer, der Aphorismen schreiben kann, sollte sich nicht in Aufsätzen zersplittern. [Bd.8, 238] 加えて小説に関しては、直截に次のように語る。「叙事的なるものの中には凍った過剰がある。」Im Epischen ist etwas von gefrorener Überflüssigkeit. [Bd.8, 253] ここで意識的に使われた形容矛盾が指し示す逆のものが、芸術には求められる。「小説をものするのは、純粋な楽しみかもしれない。小説を体験することからし

¹⁴ ハイネ論からは九つの文章が、ほぼそのままのかたちでアフォリズム集に採録されている。

ですでになかなか困難なことであるのだから。けれども私は、何とかなるのならば、小説を読まないように用心している。」 *Einen Roman zu schreiben, mag ein reines Vergnügen sein. Nicht ohne Schwierigkeit ist es bereits, einen Roman zu erleben. Aber einen Roman zu lesen, davor hüte ich mich, so gut es irgend geht.* [Bd.8, 119] 以上のようにみてくると、小説に対して、クラウスがある種の固定観念から批判を発している憾みが見えないわけではない。けれどもこれらの批判の背後には、「小説」という芸術形式が持つ危うさ、つまり「芸術形式」としての曖昧さを指摘する意図があり、それと同時に、「小説」を芸術であると受け取る受容者の態度も問題視されている。従ってここにも「小説」をはじめとして「散文」とは、いかにあるべきかという示唆が潜んでいる。

これと同じような批判の例としてあげられるのは、アフォリズムのバリエーションである『ハイネとその顛末』 *Heine und die Folgen* と題する箴言詩である。

ハイネとその顛末	Heine und die Folgen
この散文、つまり歌の本以来	Seit dieser Prosa, diesem Buch der Lieder
誰もがたやすく言語の快樂を減じている。	hats jeder leicht, die Lust der Sprache zu verringern.
誰もが言語のコルセットを解き、	Er löst ihr das Mieder,
ハイネに続く連中がその乳房をまさぐるのである。	damit sie an ihren Brüsten fingern. [Bd.9, 388]

『歌の本』にクラウスが見た韻の恣意性を、言語の自然必然的な存在形式からは乖離したものとみなす点で、詩であろうとも散文と呼ばれ批判される。¹⁵ 詩人ハイネをネガティブな意味での「散文」作家であると断じると同時に、ハイネの「詩」を芸術であると疑わない受容者も俎上にのぼせられる。

ところでエポスの発展形式としての小説は、この時期に、芸術であることを意識的に宣言し始める。トーマス・マンがその代表格であり、彼ほど小説は芸術であると主張した作家はいない。今日では、内的に世界を構築する点での緻密さからいって小説が芸術であることはいまやまたない。しかしクラウスにはそれは、過剰であるとみえた。むしろ小説はひとつの独立した世界を構築する言語芸術である。それは同時にその世界の中でテクストの網の目、つまりコンテクストを構築する。それに対し、アフォリズムは、とりわけアフォリズム的文体は言語内部において自足する。この意味でコンテクストではなく、純粹に言語環境内部、つまり「孤立可能性」 *Isolierbarkeit* によって世界を構築しつつ、かつはまた世界を変える可能性を持った形式といえる。クラウスにとってアフォリズムは散文形式の芸術として、この上ない形式であった。アフォリズムは、それ自体で世界である。切り刻まれた文章であってはならない。コンテクストという「外部」に意味を求めるのではなく、ことばの自然必然的な結びつきを言語の内部に求める「孤立可能性」こそがクラウスの要請した散文の姿であり、「ことばの姿」という概念に通じるものである。

後期のクラウスは、アフォリズムからエピグラムおよびエピグラフ、あるいは「詩となったことば」 *Worte in Versen* へと創作の軸足を次第に移してゆく。彼がペーター・アルテンベルクに寄せた弔辞、文字通りのエピグラフの一節にこうある。

¹⁵ アフォリズムに限らず、他にも彼は、文学のジャンルを、様々に検証し直し、また新たな試みをなしている。 *Theater der Dichtung* がその代表であり、これは、詩と演劇の融合の試みである。もちろんこの延長線上にプレヒトの *episches Theater* があることは影響関係の一つと目される。

むなしくも彼は君たちに人生を差し出した。

彼はことばをくれた。君たちが信じているのは小説にすぎない。

Vergebens bot er (Altenberg) euch das Leben an.

Er gab das Wort. Ihr glaubt nur den Roman. [Bd.9, 311]

アルテンベルクの文章を Aufsatz や Skizze と呼ぶクラウスは、彼が讃辞を惜しまないアルテンベルクの散文と小説とを厳格に区別し、「小説」という「芸術形式」を頑なに拒否し続けた。¹⁶ その背景に、「小説」という芸術形式と、「君たち」とクラウスが呼びかける受容者とに向けられた批判を読み取ることも可能である。

ことばと思想

詩となることばは、韻の中でかたちとして結合するばかりでなく、意味としても響きあう。クラウスはこの韻の中にエロスを見いだす。エロスには、孤立し、あるいは孤立させられた二つのものが存在することが前提であり、それが結びつく奇跡の担い手こそがエロスである。けれども韻文ばかりでなく、ことばのエロスは散文においても見いださう。ことばの緊密な、自然必然的 (naturnotwendig) な結びつきによって世界を構成するアフォリズムがそれである。ことにクラウスのアフォリズムは、ことばそのものを主題とし、クラウスの言語思想を端的に表現している。すなわち、ことばと思想の一致である。これはクラウスが幾度となく強調した要請であった。これを実現することば同士の自然必然的な結びつきに介在するものもことばのエロスに他ならない。

「私の場合、思想のいうことをことばどおりに受けとめるから、思想は湧いて来る。」 Weil ich den Gedanken beim Wort nehme, kommt er. [Bd.8, 236] あるいは、「植字工は『ことばにあらわす』 in Worte fassen と植字した。逆であり、つまりこうである。私はことばにあらわせないような思想をことばの中で掴んだ (in Worten fassen) ののである。」 Der Drucker setzte: „in Worte fassen könnte“. Im Gegenteil und folglich: Ich habe manchen Gedanken, den ich nicht in Worte fassen könnte, in Worten gefaßt. [Bd.8, 236] これらは「言い回し」 Redensarten を「機械的にひねる」ことによって、ことばと思想の精妙な一致の経験を表現している。ことばと思想の対等な力関係が、否むしろ補完関係と言うべきものが語られている。「言語は思想の母であって、侍女ではない。」 Die Sprache ist die Mutter, nicht die Magd des Gedankens. [Bd.8, 235] 「私は、私が持たず、そしてことばにあらわせないようないくつかの思想を、言語の中から創造した。」 Ich habe manchen Gedanken, den ich nicht habe und nicht in Worte fassen könnte, aus der Sprache geschöpft. [Bd.8, 236] この二つのアフォリズムには思想の母胎としての言語が語られている。

クラウスの言語観における人間とことばとの関係も、アフォリズムに結晶化している。次のアフォリズムにおいては、ことばに忠実たらんとする自らの態度が、諧謔的に告白される。「私は他人のことばしか意のままにできない。私のことばの方とはいえば、私を使ってしたいようにしている。」 Ich beherrsche nur die Sprache der andern. Die meinige macht mit mir, was sie will. [Bd.8, 326] ことばを「使う」

¹⁶ この弔辞が書かれた1919年以降のクラウスの著作には「碑文」 Inschrift という題のもと、箴言詩が多くみられるようになる。

主体としての人間は掻き消され、むしろ主体としてのことばに仕える側の人間である「私」が描かれる。¹⁷ それとは対比的に、ことばを使っていると考える人びとは、次のように仕立屋に譬えられ揶揄される。「言語は思想の衣装ではなく、思想が成長して言語に合うようになるということを、謙虚な創造主が傲慢な仕立屋に信じ込ませることは決してできないであろう。」 Daß die Sprache den Gedanken nicht bekleidet, sondern der Gedanke in die Sprache hineinwächst, das wird der bescheidene Schöpfer den frechen Schneidern nie weismachen können. [Bd.8, S.325f.]

ことばの有機的な結合を手助けする役割のみが、芸術家の手に委ねられる。「思想は世の中にある。けれどもひととはそれを持たない。思想は素材の体験というプリズムを通してことばの元素の中に散在している。芸術家がそれを思想に仕上げる。」 Der Gedanke ist in der Welt, aber man hat ihn nicht. Er ist durch das Prisma stofflichen Erlebens in Sprachelemente zerstreut: der Künstler schließt sie zum Gedanken. [Bd.8, 236 u. Bd.4, 202] アフォーリズムもまた「ことばの姿」を有する散文の芸術形式である。二分法的思考の図式に示した言語の一方の存在形式において、つまり「ことばの姿」において、言語と思想の一致は実現される。エロスの前提は、孤立していることと共にあることである。共にあって孤立しているもの、それをつなぐものがエロスである。プラトンが『饗宴』の中でいうように、人間と神々をつなぐのがエロスであるとするならば、人間を言語と思想の一致へと橋渡しするアフォーリズムもまた、エロスの兄弟といえる。

¹⁷ 「人間よ、ことばに仕えることを学べ」 Der Mensch lerne, ihr (der Sprache) zu dienen. [Bd.7, 373] という警句は、彼の渾身の論「言語」の末尾に据えられた要請である。